

# 親や祖父母の子育て

－ 過去と現在 －

Child Rearing

－ Today and Yesterday －

デイビッド・エルカインド著、水田聖一\*訳

David Elkind, Seiichi Mizuta

【解題】デイビッド・エルカインドはタフト大学名誉教授で、児童発達心理学者。本訳論文は、*Grandparenting, Understanding Today's Children* (Scott, Foresman and Company, 1990)の第2章の翻訳である。現代アメリカの社会では、子ども期は、自らの学習課題やニーズ、責任を果たすべき人生の一段階としては見なされていない。もはや今では、子どもは人生の栄枯盛衰に対処できる能力を持つものと見なされ、保護や特別の考慮を必要とするものとは見なされなくなってしまった。このことが親や祖父母の子育てを一層困難なものにしている、とエルカインドは警鐘を鳴らす。

キーワード：学習優位説、成熟優位説、ピアジェ、フロイト

## I. 緒言

成長・発達とはひろく動物界全般の現象であり、動物界全般にわたって変わらないものもある。少年期と思春期の子どもは、動物界の中のヒトという種の若者であり、他のすべての種と同様、時間と場所に依存しない一定の特徴を示す。例を挙げると、すべての乳幼児は多かれ少なかれ無力であり、大人が世話しなければ生き残れないだろう。子どもたちは、例えば制限することのよるような操作的な活動から学ぶのであり、少なくとも論理的な説明から学ぶのではない。学齢期の子どもたちが、最も容易に情報を得るのは実践的な活動、討論、探検、遠足などを通して未知のことをよく知るようになる場合だ。しかし青年期には、ガリバー旅行記が単なる物語ではなく政治的な寓話であることを知るようになり、よく知られているものを再解釈すること、つまり抽象化することで学ぶという特徴がある。青年は哲学、歴史、芸術の偉大な思想から大いに刺激を受けるものだ。哲学、歴史、芸術はそれぞれ、よく知っている経験や出来事を新しい文脈に置き、新たに解釈し直すからだ。

---

\* 流通科学大学商学部 〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

(2020年11月27日受理)

©2021 Center for Promotion of Higher Education

## II. 親子関係 : 一定不変のもの

幼少年期の発達のこれらの特徴は、時代を超えて変わることはなく、親子関係や子ども同士の関係の同様の類似した出来事においても同じ事が言える。これらの人間関係の多くは古典文学においても強調されている。聖書に記されているカインとアベルの物語は、兄弟間の争いの悲劇的な物語だ。モーセの場合は、未婚の母親の養子にされ、子ども期から成人に至るまで成長した。そして、息子イサクと神との間の競合する忠誠心に引き裂かれるアブラハムの有名な物語は、宗教の違う人との結婚や離婚また再婚をした親と祖父母との間の競合する忠誠心の問題に予言的な洞察を与えている。

シェイクスピアの『リア王』は、親子間の間違った忠誠心や愛情という古くからある悲劇の一例を提供している。また『ハムレット』は、別の基本的な家族のテーマである傷つけられた家族に対する復讐が、悲劇的に描かれている。同様にジェーン・オースティンの作品では、よくある親子間のテーマが見いだされる。『高慢と偏見』では、娘の結婚についての母親の心配があり、二人の年上の娘は、これまで両親からの「何気ない」発言と苦情に当惑したことがあるすべての子どもに対して同情的な実例を提供している。マルセル・ブルーストは『失われた時を求めて』のなかで、ある子どもの、何にもまして耐えがたい母親への愛情と依存とを描写している。

これらのテーマ、つまり兄弟げんかや忠誠心、復讐、不安、誇り、偏見、当惑、貪欲、愛情、恩知らず、おせっかいなどは、いつでもどこにでも存在する家族のドラマの一部だ。それらは時代を超越した普遍的な人間の感情や葛藤であるため、文学や音楽、宗教、言語に埋め込まれている。またそれゆえに、出産、思春期、結婚、死などの主要な通過点を取りまく種々の儀式がある。これらのテーマと儀式は、すべての子どもが関与し、すべての子どもが順応しなければならない家族生活にとって多くの一定不変のものの一つだ。

しかし、人の情熱や家族の儀式というものは、個人や家族の生活がその中で展開される制約または限界であるにすぎない。その展開の固有の特徴は、家族やそこに生まれた特定の個人が生活する文化的、歴史的時間と場所とによって、完結された形を与えられることだ。祖父母として私たち自身の立場を視野に入れるために、これらの文化的、歴史的状況を見直さなければならない。私たちは時々、子どもや孫らと接することが、自分や自分の文化にとって類い希な挑戦のように感じるかもしれないが、他の文化や歴史を垣間見ることで、私たちが経験する個人的な挑戦が、決して特別のものではないと理解できるだろう。

最初に私たちは文化と歴史的期間が、家族生活と子育てにどのように影響するかを見極める必要がある。歴史と文化の分離はせいぜい人為的なもので、ここでは説明のためだけに使われる。両方の議論を通して、この論文の最後のセクションにある現代アメリカの家族と子育てについての枠組を提供する。

### Ⅲ. 文化

文化は、時と場所によって異なる。時間の経過と共に文化がどのように変わるかの一例として、もしトム・ソーヤが現代に成長しているとすれば、どうなっているかを想像してほしい。彼のあこがれの対象は、ミズーリ川の水先案内人(pilot)ではなく、たぶんジェット機のパイロットまたは宇宙飛行士だろう。間違いなく彼は、馬やいかだではなく 10 段変速のバイクで走り回り、オーバーオールではなくジーンズをはいているだろう。彼は口笛を吹きながら木を削ることではなく、ステレオに耳を傾けテレビ(訳者注:現代ではスマホ)を見ているに違いない。彼は学校ではコンピュータを学び、家では、ポリーおばさんが電子レンジで簡単な食事を用意していることだろう。トム・ソーヤは親の子であるだけでなく、彼の文化的な時代の子でもあった。

#### 1. 均質な文化

トム・ソーヤの例は、別の要点も示している。私たちは本質的には、物語を愛し、物語を語り、物語を作りだしているという点だ。私たちの生活は一連の物語のようなものであり、個人の生活や個々の家族は、基本的な人間の情熱や儀式をそれぞれ異なった仕方でするにより、多様性がある。文化的なバリエーションを詳述することはできないが、いくつかの物語を簡単に見ることにより、様々な文化において子育てや教育の仕方に親たちが基本的に誇りと情熱をもっていることが分かり、基本的な人間の教育計画をそれぞれの文化が独自に描き出していることが理解できるだろう。

古代中国では、裕福な家族にとっての親の誇りは、若い女の子の足を縛るという形を取ったので、大人になったときにはその子の足は確実に損なわれていた。裕福な家族だけが、娘に対してこれを行った。実際それは、娘は働く必要がないくらい家族には十分な資産があることを目に見える仕方で示すためのステータス・シンボルだった。多くのアメリカインディアン部族では、親の誇りは反対の方向を向いていた。しばしば、どのような身体的な欠陥であれ障害を持つ子どもは、幼いときに捨てられた。これらの社会では、身体的な欠陥は神の不興の象徴とみなされた。今日でさえ、インディアンの子どもたちに眼鏡や補聴器を着けさせることは困難だ。それらは「欠陥」であることのはっきりと見えるしるしだからだ。

日本人の誇りは、やや異なる面を呈している。幼い頃から日本の子どもは、大人に従い、大人を尊敬し、家族の階層や学校のレベル、地域を含む社会的グループと一体感を持つように訓練される。個人主義は利己心とみなされ、無視されたり非難されたりする。日本の諺で言う「出る杭は打たれる」である。日本人にとって個人の誇りは、家族や社会の誇りともなる。これは両面で作用する。個人の業績と個人の失敗はともに、家族と社会にとっても失敗とされる。だからこそ日本では、自殺が個人的な鬱病というよりも社会的な不名誉と考えられるのだ。

アメリカでは、誇りは日本人の誇りとは正反対のものだ。アメリカ人の誇りは非常に個別化さ

れており、より大きな社会の個人主義を反映している。子どもは自らの仕事に誇りを持つように命じられる。それゆえ、彼らの仕事は、自らの努力、能力、才能を反映したものだ。アメリカの子どもたちが成功したり失敗したりすることに対して、責任を負うのは彼ら自身だ。協調的にプレーする野球チームなど、協力的な取り組みにおいてさえ、個々のメンバーは特別な注意を受けるために選ばれる。アメリカでは、チームプレーでさえ、個人に責任があると見なされる。

さらに誇りは、フランス語圏の文化では別の形をとる。いくつかの点で、フランスの文化は日本やアメリカの文化の中間に位置する。フランス人は集団として、自らの言語や文化に大いに誇りをもっており、言語と文化が他のどの言語や文化よりも優れていると考えている。言語や文化への侮辱は、個人への侮辱と見なされる。そういうわけで、あなたがフランス語を上手に話せないならば、フランス人は、あなたがフランス語を話すことを思いとどまらせ、まったく話させようとしないうだろう。他方、フランスの子どもたちは、遊び友達に関して極度に限定的である。日本における学級や地域社会と違って、フランスの子どもたちが主要な忠誠を示す対象は家族と友人である。それにもかかわらず、フランスの子どもたちの成績や失敗については個人的責任を取るように訓練される。幼い頃からフランスの子どもたちは、言語や文化に対する誇りだけでなく、自分自身に誇りを持つことの大切さを銘記させられる。

いくつかの例をあげただけだが、様々な文化がどのように人間の情熱の一つを扱うかという事例は、バリエーションが広く他にも考えられる。さらにこれは、文化的に形成された人間の多くの情熱のほんの一例にすぎないが、これらの例は、私たちが世界を経験し、知り、解釈するようになる仕方に、文化が大きな影響力を持つということを認めるのに役立つだろう。

## 2. 異質な文化

アメリカは明らかに世界で最も異質混成の文化だが、かつて言われていたような「人種のるつぼ」になったことは一度もない。多くのアメリカ人は民族的アイデンティティを保有し、同時にアメリカの市民権に対する誇りも大いにもっている。結果として、アメリカに見られる文化的多様性は実に驚異的だ。

例えば、テキサス州ブラウズビルでは、人口の95%はヒスパニック系で、一般的な言語はスペイン語だ。ブラウズビルの親たちは、社会化とバイリンガル教育との難しい問題に直面している。アメリカ大陸の北端にはミネソタ州ベミジーがあり、人口のほとんどはアメリカンディアンで、先住民族の親や祖父母は、広範囲に及ぶアルコール中毒の問題や学校での若者の学力不振や落第、退学の問題に立ち向かわなければならない。ボストンの中心部にある中国系アメリカ人のコミュニティでは、伝統を守り、彼ら独特の生活スタイルを続けている。中国人コミュニティは、麻薬や薬物とのいわゆる戦闘ゾーンに位置するが、コミュニティ内のどの民族よりも少年犯罪率が低い。中国系アメリカ人の親や祖父母は、周辺環境にある多くのネガティブな影響か

ら自らの子どもを遮断する方法を発見したようだ。

潜水艦基地があるコネチカット州グロトンでは、幼稚園に 26 の異なる言語を話す子どもが在籍することもしばしばである。親のほとんどは海軍の男性が旅行中に結婚した女性だ。これらの親たちは、恒常的な転勤の問題、新しい学校、新しい友人、新しい言語の問題に対処しなければならない。ほんの数マイル離れたところにあるコネチカット州のオールドラムでは、コミュニティが異常に均質で、民族の多様性はほとんどなく、社会的可動性もほとんどない。このコミュニティの親たちは、グロトンの親たちが実際には関わることがない地域の学校やコミュニティの問題について最も懸念している。

この民族の多様性がすべての親や祖父母に引き起こす特別な問題の一つは、異民族間の結婚だ。均質な文化圏では、異宗教間や異人種間の結婚は、あったとしても非常にまれな問題で、その可能性はほとんどまたはまったくないだろう。しかし異質な文化圏では、異宗教間や異人種間の結婚はよくあることである。それゆえ、アメリカ人の親や祖父母たちは、子どもや孫が違う民族や人種、宗教的背景をもつ人とデートをしたり結婚したりするという現実には頻繁に直面する。

親や祖父母がどのようにこの問題に対処するかは、関係する人の性格や個性だけでなく、宗教や民族、人種のアイデンティティにどれほど関与するかによって依存する。文化的多様性は、文化的均質性と同様に、それ自身の特別な問題を持っている。

## IV. 歴史

家族の儀式や家族が熱心に行う事柄が、育児や教育においてどのような役割を果たすかは、文化的価値観や信念に大きく依存している。しかし、ある時点のある社会で、子どもがどのように見なされるかは、二つの主要な歴史要因に左右される。一つは、その国が社会文化的に焦点を当てているもので、もう一つは、教育や人間の成長、発達に関して、その時点で存在し受け入れられている実践である。

### 1. 社会文化的焦点

歴史のいつの時代でも、社会内の社会文化的条件によって子育てや教育の方向性と目的が決められた。古代ギリシャ、ローマでは、国家の保全と富国強兵とが第一優先事項であり、貴族の家庭の子育てや教育は、市民権に向けられていた。どちらの文化においても、女性は二級の市民と扱われた。古代ギリシャでは、若い男子（女子にはない）には、学校教育が与えられる必要があるとされた。少年および青年のカリキュラムは芸術と科学を含み、6、7歳から始められた。ローマ時代には、この教育は多くの武術を含むように修正された。ギリシャとローマ時代には、子育てと教育の目的は、国家に忠実な市民としての責任ある男子を産み出すことだった。

中世には、国家ではなく教会が社会の政治的力の中心になった。この期間に、教育はその焦点

が宗教的なものになった。若者は依然としてラテン語とギリシャ語を学んだが、今や目的は、オビディウスの詩ではなく聖書の詩編や賛美歌を読むことだった。若者は国家ではなく教会に仕えるよう育てられ、教育された。確立された権威に対する敬意は絶大で、教会内でアリストテレスは倫理学から生物学に至るまですべてのテーマの知識源になった。

ルネッサンス以降、国家がしだいに民主化されることによって、子育てと教育の焦点は再度変化した。選挙で選ばれた政治家が王権を神授された王族に取って代わったように、科学が真の知識の源泉として確立された権威となった。今や教育の目的は、男子と女子の両方が自治権をもつ市民になる準備をすることとなった。印刷機の発明により、一般大衆にも教育を提供できるようになり、真の民主主義を実現することに大きく貢献した。さらに、産業革命と工場労働や機械の出現により、教育は子どもたちが読み書きできる労働者になるようにも備え始めた。

ロシアや中国などの社会主義国では、国の社会文化的イデオロギーとその子育てや教育との密接なつながりが、今日おそらく最も明白に現れているようだ。これらの国々では、教育の目的は、共産主義国家とイデオロギーに忠実な個人を作ることだ。しばらく前まで、この教育はしばしば厳格かつ妥協の余地のないものだった。ロシアと中国の両方が、西洋の影響力を受けるようになるにつれて、教育はより社会経済的哲学の違いにさらされるようになった。しかし、中国における学生デモの取り締まりが明白になったため、このプロセスは遅延し、停止している。

それで一般的には、それぞれの社会文化の単位は、子育てと教育を通して自国の価値観やイデオロギーに忠実な人間を作ろうとする。

## 2. 科学的知識

西洋の歴史を通じて、哲学者と教育者とは、子どもに対する見方や子育てと教育に対する見方が異なっていた。過度に単純化させると、その違いは二つの一般的で相反するカテゴリーに分類することができ、どちらも現代アメリカで支持者を持ち続けている。これらの見解の一つは、子どもの「環境説」または「学習優位説」と呼ばれるものであり、他方は「遺伝説」または「成熟優位説」と呼ばれるものだ。どちらもかなりの真実を含んでいるが、両者とも過度に誇張されすぎている。

### a. 学習優位説の伝統

子どもが環境によってすべてが形成されるという見方は長い歴史を持っているが、17世紀英国の哲学者ジョン・ロックの古典的な著作『教育に関する考察』から始めることにしよう。ロックにとって教育の目的は、未熟な子どもを理性的な男性と女性にすることだった。効果的な教育とは、高い道徳的人格を持つ自己規律のある個人を作り出すことだ。ロックは、子どもの精神が「タブラ・ラサ」（白紙）だと信じており、それゆえ後天的な教育は非常に重要だと考えた。教育は、子どもの精神を道徳的で責任ある市民へと変えるための手段だった。

ロックによって提唱された子育てや教育実践は、現代の多くの著述家たちも繰り返しているの  
で、人口に膾炙している。例えば、ロックは親に対して、子どもが達成したことに対しては賞賛  
を抑制し、処罰に関しては鞭を使う代わりに、失敗に対する反応として「冷たくて無関心な表情」  
をするよう提案した。ロックにとって、子育てと教育の非常に重要な目的は自制心であり、子ど  
もが早くからこのことを教えられるべきだと信じた。彼は、泣くと乳を与えるというような甘や  
かしではなく、乳児を規則的な授乳スケジュールに置くことで自制心を教えるべきだと提案する  
現代の多くの著述家たちを予表してした。

### b. アメリカにおける環境説の伝統

ジョン・ロックの直系で比較的現代の弟子は、アメリカの心理学者ジョン・ワトソンだった。  
その行動主義の教義は、20世紀の最初の数十年間人気があった。ワトソンはロックの白紙の観  
念を限界にまで広げた。ワトソンにとっては、子どもは順応性のある粘土にすぎないので、もし正  
しい子育て実践を行ったなら、両親が望むどんな子どもにもすることができると言った。

「私に十人程の健康で発育の良い乳児を与えてくれれば、どの子どもでも任意に、どんな種類の専  
門家にでも養成してみせよう。医者でも、弁護士でも、芸術家、最高の商人に、実に乞食や泥棒  
でさえ。彼の能力、性格や好み、祖先の人種や職業に関係なく。」(John Watson, *Psychological Care  
of Infant and Child*, New York: Norton, 1928)

ワトソンほど過激ではないが、B・F・スキナーは、行動主義者または環境説の現代の支持者だ。  
彼は1940年代以来、人間の行動を修正するための唯一の方法が、環境により提供される報酬と罰  
(強化因子)だと主張してきた。彼は、「意志」や「自由」、「選択」のような言葉が、科学的価値  
を欠いた意味のないラベルであるとも主張した。私たちが何をし、誰であるかを決定するのは、  
私たちが経験する強化のパターン以上でも以下でもない。スキナーの仕事の一部は、「行動修正」  
として受け入れられる方法論になった現代の多くの子育てや教育実践に組み入れられてきた。そ  
してそのようなテクニックは、もし適度にかつ他の技術と結合されて使用されるなら、時に有益  
でありうる。

### c. 成熟優位の伝統

子育てと教育における2番目の伝統は、19世紀のフランス人哲学者ジャン・ジャック・ルソー  
の著作に遡ることができる。彼の古典的な本『エミール』において、ルソーは子育てと教育にお  
いて発達的な伝統を基調にした。エミールの物語自体には少々無理がある。家庭教師は、エミ  
ールと名付けられた少年を田舎に連れて行き、家族や社会の墮落した影響を受けなくて、エミ  
ール自身の行動の結果だけを通して学ばせることを教育方針としている。ルソーは書物を信頼せず、  
エミールは読むために『ロビンソン・クルーソー』以外ほとんど何も与えられなかった。教育と  
は、直接的な経験と推論から学ぶことだからだ。

後のアメリカの哲学者・教育者ジョン・デューイは、このようにして育てられたエミールは、

大人になったときには幾分堅物になるだろうと述べている。しかし『エミール』で重要なことは、その素朴な教育心理学を除いて、ルソーが子どもについて語った事実である。「自然は子どもが大人になる前に子どもであることを望んでいる。この順序をひっくり返そうとすると、成熟してもいない、味わいもない、そしてすぐに腐ってしまう速成の果実を結ばせることになる。私たちは、若い博士と老いこんだ子どもを与えられることになる。子どもには特有のもの見方、考え方、感じ方がある。その代わりに、私たちの流儀を押し付けることくらい無分別なことはない。そして私は、10歳の子どもの判断力があるなら、身の丈も5尺ぐらいあっていいのではないかと思う」。(『エミール(上)』今野一雄訳、岩波文庫、p.125.)

ロックの作品と同様、ルソーの著作は多様に解釈できる。親と教師が、実のところ著者とかなり異なる価値観や態度を補強するために独創的な思想家の作品を使用することは良くあることだ。例えばルソーは、既存の子育てや教育が制限的すぎると感じた一部の親や教師たちに熱心に読まれた。それら一部の親や教師は、その権威としてルソーを使い、すべての抑制と制限を廃止したが、ルソーが主張した抑制と自由との間のバランスからは程遠い壊滅的な許容性に終わった。

教育の中で、ルソーによって始められた成熟優位アプローチは、スイス人のヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチとドイツ人のフリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベルによって促進された。1837年にフレーベルは幼稚園を創設し、幼児特有のニーズと学習能力を満たすための教育的なプログラムが設計された。19世紀後半、特にその最初の数十年間、イタリア人の医師で教師であったマリア・モンテッソーリは、幼児教育のための多数の実地カリキュラム教材を作成し、ペスタロッチやフレーベルの仕事を促進した。

#### d. アメリカでの成熟優位の伝統

アメリカでは、ジョン・デューイも、子ども期の個々の発達段階に特有な思考と学習の様式に適する教育プログラムを設計することを試みた。彼は特に日常生活に意味と実質を与えるために、生活と教育とを結びつけることに関心を抱いていた。デューイの見解では、教育は、もしそれが「機能的」であるなら、つまり子どもが現実世界で使うことができる何かを与えられるなら、最も効果的である。デューイは古典学習には反対しなかったが、ギリシャ語やラテン語のような教科は、これらの言語を教える人々か、それらの言語を必要とする研究をする人々にとってのみ価値があると考えた。デューイの考え方は翻案され、また非常にしばしば誤解されて、20世紀初期の数十年間に人気を博した「進歩主義教育」のシステムに組み込まれたが、1950年代までには放棄された。しかし、進歩主義教育の最もよい実践のいくつかは依然として保持されている。その一つは、いわゆるプロジェクトメソッドである。プロジェクトメソッドの一つのバリエーションとして、歴史の特定の時期を一学期間中取り組むクラス授業がある。例えば、アーサー王の時代では、本を読み、文章を書き、アーサー王についての劇を演じるなどできる。プロジェクトメソッドは、デューイの主要な教育信条、つまり「子どもたちは為すことによって最もよく学ぶ」と

いうことの最もよい例だ。

#### e. 心理学における成熟優位の伝統

心理学の分野では、成熟優位説の伝統はマサチューセッツ州ウースターにあるクラーク大学学長の G・スタンリー・ホールによって進展した。ホールはクラーク大学を創設しただけでなく、「子ども研究運動」を展開し、「遺伝心理学ジャーナル」誌の創刊を始め、今日発達心理学として知られている分野を創設した。『青年期』（1904）と題された彼の 2 巻本の著書は、この分野での古典的な文献だ。ホールは発達段階を強調し、子どもたちは教えられたことに応じてではなく、発達段階に応じて世界について考えるという事実を強調した。

適例は、性的関心についての前期青年期の子どもの考え方についての研究だ。ホールは、若者が抱く自慰のような性的活動の影響についての考え方、また若い女性が抱く妊娠についての観念が、非常に歪められたものだ気付いた（多くの女の子は、キスをすると妊娠すると信じていた）。そのような歪みは、青春期の思考の必然的な産物であるようだ。例えば、致命的な病気であるエイズについての青年期の観念についての最近の研究は、かなりの割合の若者が、手をつなぐことでうつるという観念を含む、まったく誤った観念を持っていることを明らかにした。

#### f. 成熟優位の伝統へのフロイト派の影響

G・スタンリー・ホールが、ジグムント・フロイトの仕事の価値を認め、精神分析学という新しい学問分野を評価した最初のアメリカの心理学者の一人であったことは驚くべきことではない。実際、1909 年に一度限りフロイトをアメリカに招待することに成功したのは、ホールだった。ルソーとホールは、子どもの認識や思考方法について関心を持っていたのに対して、フロイトは、子どもの感情や欲求の方法に深い関心を抱いていた。フロイトは、子どもには、子ども特有の性的関心があり、認識方法や思考方法の発達と同様に、発達段階を通じて変化するとの見解を示した。発達に応じて出現する性的欲望が塞がれて、どのような形であっても表現されることが許されない時、ダムでせき止められた性的なエネルギーは情動障害、つまり神経症を引き起こす可能性がある。

このように、フロイトの仕事は子どもの発達のまったく新しい側面を照らしたが、児童心理学の歴史における多くの他の著者たちの考えと同様に、彼の概念もすぐに歪められた。成人レベルにおける一つの極端は、いわゆる「野蛮な精神分析」だった。つまり、神経症は性的抑圧の結果であるので、神経症の治療法は性的な認可を与えることだと提案された。子育てや教育レベルでは、時々フロイトは何でも許容することを主張したと誤解された。一部の親や教師は、いかなる抑制も有害であるということを読み取ろうとしてフロイトを読んだ。この立場からすれば、もし子どもたちが限界や制限、規律なしで成長することを許されるなら、精神障害にかかることはないという。

もちろんフロイトは、そのようなことを提唱したことは一度もなかったし、衝動や欲望の抑制

が必然的に悪いとか有害だ、と書いたところもどの著作にもない。一方でフロイトは、抑制そのものではなく過剰な抑制が不健康になりうることを明確にした。しかしフロイトが著書『文化への不満』(*Das Unbehagen in der Kultur*, 英訳のタイトルは *Civilization and Its Discontents*) において論じたように、人々が文化的な仕方で協同生活をするためには、抑制が必要である。さらに、社会において生産的で創造的なものの多くは、社会的に受け難い欲望や衝動を「昇華」するか、衝動を別の方向に向けることによって生まれる。要するにフロイトは、何でも許容することを主張したことなど一度もなかったのだ。

### g. ピアジェと成熟優位の伝統

現在、成熟優位の立場で最もよく知られているのは、スイス心理学者故ジャン・ピアジェ (1896-1980) だ。心理学だけでなく生物学者また哲学者として訓練されたピアジェは、心理学と同様またはそれ以上に哲学に興味を持っていた。彼は認識論の基本的な問題「我々はどのように世界を知るようになるか」について関心を持った。しかし彼は、哲学者がこの問題に出した答えには不満を抱いていた。彼にとっては、個々の哲学者は肘掛け椅子に座り、子どもがどのように世界を知るようになるかを単に想像したにすぎないと感じていた。ピアジェは、この問題を実験的に研究したいと思い、実際そのようにした。

ピアジェは、実際に子どもがどのように空間、時間、数、因果関係などの考えを構成するかを研究することに取りかかることで、世界を知る方法についての問題に答えようとした。研究を始めた頃、ピアジェは子どもの思考に関する研究にはほんの数年しかかからないと思っていた。これらの研究が完了した後、彼はより重要な生物学的、哲学的調査に戻ることを計画していた。しかし実のところ、ピアジェは子どもや思春期の若者が世界を構築する方法を研究するために、専門的な研究者としての残りの人生すべてを費やすことになった。

彼の調査結果は、100冊近くの本と数千の論文や本の章として出版された。心理学分野の個人の著作としては、特に一般科学の歴史においては、最も広範囲に涉っている。ピアジェの仕事の全範囲の十分な評価は、まだ完全には行われておらず、ましてその影響については心配が感じられる程度でしかない。それにもかかわらず、彼の仕事はすでに子どもの発達分野を変革し、教育に多大な影響力を与えた。おそらく何にもまして、ピアジェの仕事は、現在アメリカで進行中の、感情や情動に関心を持つフロイトの理論から知性に関心を持つピアジェの理論への転換を強力に推し進めた。

残念なことに、多くの革新者と同様に、ピアジェは誤解され、彼の考えは特に教育分野で誤用された。何故かというと、ピアジェの仕事が基本的に発達に関するものであり、知的成長が年齢に関連する一連の段階にしたがって進行するものであり、急ぐことができないと主張したからだ。しかしながら、発達の観点は、アメリカの価値体系の重要な構成要素と矛盾した。

### h. アメリカにおける成熟優位説への抵抗

今日のアメリカ人は、まだフロンティア精神の多くの残余を保持している。私たちは依然として、もし物事の仕組みが気に入らないなら、いつでも身支度して他のどこかに移動できると信じている。今日でさえまだアメリカには多くのスペースがあり、もし望むなら人口が100万人未満で土地の面積が非常に大きい州に引っ越すことができるだろう。変化の可能性とすぐに変化する準備ができるとの信念があるため、地球上の他のどの社会よりも変革に対して寛容である。私たちは革新によって実験し、他のほとんどの社会がそれらを試す用意ができる前に、それらを捨ててしまうこともよくあることだ。一例を挙げると、私たちはフロイトをすぐに受け入れたが、ヨーロッパ諸国、特にフランスが彼の仕事を真剣に受け入れ始めている現在、アメリカはフロイトの考えから離れ始めている。

アメリカのフロンティア精神には確かに多くの利点はあるが、否定的な側面もある。一つの例は、もしある事柄に思いを向けて一生懸命働くなら、どんなことでも達成できるという確信だ。私たちは、この哲学を本や映画、テレビのスクリーンで何度も繰り返されるのを聞く。この哲学によると、人生での成功を決定するのは、いつも「99%の努力と1%の能力」である。これは非常に民主的な信念体系であり、出自や人種、信条を問わず、だれでも成功を得ようとの希望を持って努力する人すべてを励ますものだ。この価値体系は、アメリカをすべての人に機会を与える素晴らしい国にする際に重要であった。

しかしこのような信念は、アメリカ人が発達の観点を受け入れることを非常に困難にしている。その見解では、異なる年齢段階の子どもが達成できることには限界があると考えられる。ピアジェがアメリカに来て、研究を通して明らかにした発達段階について講演した時、彼が「アメリカ人の質問」と呼ぶような質問を尋ねられた。「ピアジェさん、子どもがこれらの能力を達成し理解できるようになるまで、なぜ6歳まで待つ必要があるのか。私たちはなぜ、もっと早くそれらを教えることができないのか」。人として、私たちは限界や制約に苛立ちを覚える。新しい記録を耳にすると、すぐにそれを打破したいと感じてしまう。

アメリカでは、ピアジェの仕事によって示唆された初期の研究の大半は、ピアジェが報告したよりも早い年齢の子どもたちに、ある概念に到達させようと訓練することを目指した。これらの教育実験の失敗があっても、調査を止めようとする人たちはいた。アメリカ人の偉大な創意工夫によって、彼らは、ピアジェの研究で出来るようになると保証されたよりも早い年齢で、子どもが首尾よく実行できる方法を発明した。残念ながら、仕事をより容易にこなすことは、子どもをより賢くすることと同じではない。ピアジェは現代の心理学や教育に大きな影響を与えたが、その知能が年齢とともに発達し、子どもの理解には限界があるという彼の仕事の主要な主張は、真に受け入れられることはなかった。

このように、歴史のどの時点であっても、子どもをどのように見るかは、単に当時の科学知識の反映ではなく、その時代の社会文化的条件にいつも脚色されている。現代のアメリカ社会は、

その適例である。過去半世紀で、子ども観や子育て観において劇的な変化があった。しかしこれらの変更は、子どもの成長と発達に関する知識における革新的で新しい重大な発見があったというよりも、社会文化的な変化に関係している。

## V. 子育て 20年前と現在

過去は常にプロローグなので、すぐ直前の過去を見て、祖父母が育っていた2世代前の育児と現代の育児との違いを見る必要がある。この比較的短期間にいくつかの大きな変化が起こり、数十年前と比べて、現在の育児は大きく異なっており、ストレスも増加している。どの変化も絶対的なものではないが、それらすべては同一線上にある。

### 1. 共稼ぎの夫婦

今日、2世代前よりも共稼ぎの夫婦が増えている。共稼ぎの夫婦が、刺激的で興味深く、挑戦的な結婚生活を送ることができる一方で、仕事や配偶者、子どもへの関与などを両立させることが恒常的なストレスとなる。よくあるケースだが、両親が週日すべてまたはほとんど、別の地域で生活し仕事をする必要がある場合、このことは特にあてはまる。

### 2. 離婚率の増加

別の変化は離婚率の増加だ。離婚率は1980年代には一貫して下降したが、依然として二件の結婚のうち一件が離婚に終わると見積もられている。離婚は、関係するすべての人々にとって大きなストレスであり、離婚率の増加は現代の家族にとって比較的新しいストレスとなっている。もちろん最近までは、片方または両方の結婚のパートナーの早死が一般的であったというのは真実だ。それにもかかわらず、死は離婚とは異なっており、いくつかの点で離婚よりもストレスの度合いが低い。

### 3. 都市部への移転

農村地域に住む家族の数も、過去2世代にわたって大幅に減少した。家族が都市部に移動するにつれて、農村生活の一部であるコミュニティ感覚が失われることがよくある。さらに家族は、自分で食べものを育てたり自分の服を作ったりすることだけでなく、レクリエーションや娯楽を自分で作り出すという機会もはるかに少なくなっている。現代の若者は、家の外でレクリエーションや娯楽を見つけなければならないので、親は子どもの生活に影響を及ぼすという点での制御機能を失ってしまった。

### 4. テクノロジーの変化

さらに別の変化は、技術革新とテクノロジーの家族生活への影響だ。最近の2世代における変化は非常に大きなものだった。ここでは、子育てと教育的観点に関するものだけに注目することにする。今日の多くの科学技術の驚異が発明される以前は、家が幼児のための自然学習の環境だった。例えば、マフィンの缶詰やパイ皿、めん棒、木製の洗濯ばさみ、洗濯機と同じ目的を果

たしたかつての洗濯板があった。これらの器具すべてや他の同様の多くの道具は、幼児のための自然で安全なおもちゃだった。

### 5. 新しい学習素材の必要性

今日、共稼ぎ家族の増加と共に、冷凍食品、電子レンジ、ファーストフードレストランの出現によって、家で調理や焼きものをする家族はますます少なくなった。それゆえ、かつて幼児のための自然な学習素材であった器具の多くは、もはや入手不可能となった。結果として親は、今日子どものために学習素材を買うことを余儀なくされており、何を買えばよいのかが分からないということもしばしばある。さらに、現在子どもと一緒に出来る伝統的な家庭活動に従事する親はほとんどいないので、多くの現代の親は、文字どおり子どもにどう関わればよいのかを知らない。このように、現代の親にとっての主要なストレスは、子どもにとって挑戦的で興味深い素材や活動を見いだすこととなっている。

### 6. 薬物文化の受容

現代と2世代前の状況のもう一つの主要な違いは、アメリカの中流家庭が薬物文化を広範囲に涉って受容したことがあげられる。確かに、薬物はアメリカ社会では何ら新しいものではない。20世紀の始めに、アヘンは子ども向けの穏やかな鎮静剤として処方され、上流社会の人々にもコカインはよく知られていた。1920年代に書かれたコール・ポーターの静かなポピュラー・ソング“*I Get a Kick Out of You*”の歌詞の一つは、「私はコカインからは全く快感を得られない」だった。この歌は、より保守的な1940年代と1950年代には、「私はシャンパンからは全く快感を得られない」に変えられた。最近では、歌手はまたオリジナルの歌詞で歌っている。

それにもかかわらず1960年代には、多くのロック・グループが薬物使用を主張し、それまではアルコールが百薬の長だった中流階級の若者に、薬物を効果的に浸透させた。中流階級の親や若者によるマリファナやコカインのような薬物の使用と受容は、2世代前からの変化であり、薬物使用のリスクについて子どもや孫に教えなければならないと思う親や祖父母に大きなストレスを課している。

### 7. 健全な子育てに対する少ない支援

2世代前からの別の変化は、現代の親や祖父母にとってストレスの主要な根源であるゆえに注目されるべきものだ。多くの点で現代のアメリカ社会は、2世代前よりも、全体として健全な子育てに協力的ではない。例えば、母親の社会進出の動きは、親の世話に代わる、良質で入手可能な育児の提供を伴うものではなかった。国中いたるところの公的な遊び場は消滅したか、資金不足のために大幅に減少している。学校も、多くの場合、あまりにも若い年齢から子どもを過度にテストし、非常に早い年齢段階で過度にアカデミックになっている。これに対応して、ますます多くの親は子どもを私立学校に入れるか、自宅で勉強させている。

メディアももはや健全な子育てに協力的ではない。2世代前には、子どもが見たり読んだりす

る素材には厳密な不文律があった。今日メディアで一般的な言葉の多くは、2 世代前であれば消されていただろう。20 年前の規準は若者には過度に禁欲的で保護主義的だと考える人もいるが、今日私たちが見ているものは反対の極にある。極端な暴力、ヌード、露骨な性行為は、子どもたちがテレビを見るゴールデン・タイムにおいても一般的だ。そのような素材は子どもたちを当惑させ、良心的な親は、常に子どもが見たり読んだりするものについて用心しなければならなくなるだろう。

最後に、商品担当者と広告主とは、もはや子どもや青少年を守り保護することを、自らの責任とは考えていない。むしろ今日、子どもや青少年は、彼らのニーズと動機づけに最もよく適した広告技術で売らざるべき儲け市場と考えられている。テレビはよい栄養を強調するよりも、たっぷりの砂糖と塩分の多い、コレステロールたっぷりの製品の広告で子どもを攻めたてている。一部の商品担当者は、子どもを天才にしたいなら、または少なくとも競争に備えさせたいならと言って、親の不安や罪悪感につけ込み、生後6ヶ月の乳児用のコンピュータプログラムなどの無価値な製品を売りつけている。

## 8. 子どもに関する法律の変化

子どもに関する法律でさえ変化した。青少年に関する法律は、青少年保護のために2世代前に構想された。これらの法律は、若い人々が他人から保護される必要（児童労働法）だけではなく、自分自身から保護される必要（親の同意についての法律）も認めていた。しかし今日、青少年についての法律の全体的な方向性は、かなり違った方向を向いている。近年法律は、子どもが権利を主張することを保護するという方向に働いている。裁判所は子どもが親と「絶縁」することを支持し、親の同意なしで産児制限や妊娠中絶を行うことを支持した。子どもの権利は重要だが、その権利が、彼らが若者であるがゆえに未経験で、親や大人の保護が必要だと認めることも重要だ。

## 9. 子育てにおける父親の役割の増大

過去2世代に関する最後の変化は、より肯定的なものだ。それは否定的な方向性への変化を完全に補償するわけではないが、青少年に損害を与えるというよりも利点の方が多い。過去20年間、特に中流階級の男性の間で育児参加が増大した。これはある程度、現代社会において男性が自らのイメージを変化させ軟化させたことを反映している。現代社会では、男性が自らの感情を表すことや他の人の必要に敏感であることは容認されている。そのことで、女性の役割も変化した。より多くの母親が労働力に参入するにつれ、必然的に男性は、育児と家事の多くを共有する必要が生じた。

中流階級の男性の育児参加が増大したことは、社会の他の分野での健全な子育て支援の欠如を相殺するのに役立っている。女性は相変わらず子育ての面で矢面に立たされているとはいえ、父親の新たな育児支援と女性が自発的に稼ぎ手以上のものになるろうとしていることが、家族を強化

し、社会的圧力によって現代の育児を非常にストレスの多いものにするしかない状況を幾分かは緩和している。

要約すると、現代のアメリカ社会では、もはや子ども期は、子ども自らの学習課題やニーズ、責任を果たす人生の一段階としては認められていない。今日子どもは、人生の栄枯盛衰に対処できる能力をもつものと見なされ、それゆえ保護や特別な考慮の必要などないと考えられている。そのために、子どもたちに子ども期の特別な楽しみを十分に与え、その時期特有の痛みも感じて欲しいと願っている親や祖父母の取り組みは非常に難しくなっている。一般に健全な子育てとみなされているものに対する社会的支援はほとんど見られないのが現状だ。